【土木計画学研究・論文集 Vol.22-Ⅲ 2005年10月 招待論文】

状況景観モデルの構築にむけた基礎的研究*

Basically Research for Development of Landscape Model Based on Situation *

星野裕司**

By Yuji HOSHINO**

1．はじめに

明治期に建設された沿岸要塞を対象として、そこに現れる環境把握手法を分析してきた[1~3]。それらの論稿では、構図論と場所論や固定相と可能相、あるいは複眼性と言った表現で研究の枠組みを提示してきた。そこで本稿では、それらの枠組みを整理・統合し、一連の要塞研究の背景となる考え方を詳細に論じることとしたい。

例えば、木陰に入れば涼しそうだ、というように、実生活で経験される空間は、人々の行動と結びついた操作的意味に満ちている。人は景観に対した時、そこで体験されるであろう出来事をイメージし、それを通じて景観の解釈・受容・操作を行うことがあり、これらは仮想行動として知られる考え方である。一方、軍事技術者が要塞を構築するときには、敵の動きを読みながら地形を自らの味方とするように砲台を配置していく。そこでは、敵に勝つと言う端的な価値観から、空間の操作的意味を発見し顕在化させることが行われているはずである。要塞に関する様々な知見を参照することによって、前述した一般的な景観体験に応用可能な、原理的なモデルの構築が可能ではないかと考えている。

中村は、山河から独立しそれを静観する客観の視点がつくり出す景観（「静観の美学（Aesthetics of detachment)」）とは別に、そこへ踏み込む私たちの身体の痕跡が刻まれた棲みごこちの風景（「参加の美学（Aesthetics of engagement)」）の重要性を説いている[4]。そもそも景観論は、環境と人間の相互関係を前提とする現象学的な基盤を持っている。現象学から実存主義に展開した哲学史の歩みが景観論においても踏襲される必然性は高く、むしろ現在では積極的に必要なことではないかと考えている。

*キーワーズ：景観論，状況，軍事，沿岸要塞

**正員，工修，熊本大学工学部環境システム工学科
（熊本県熊本市黒髪２丁目３９番１号，
TEL:096-342-3602，FAX:096-342-3507
E-mail:hoshino@kumamoto-u.ac.jp）

2．景観論における状況的な視点

（1）一般的な景観論の解釈

景観現象を分析し計画・設計するためのモデルにはさまざまなものがあるが、土木工学の分野では、操作論的景観論といわれる篠原のモデルが著名であろう。篠原はまず、「景観とは対象（群）の全体的な眺めであり、それを契機にして形成される人間（集団）の心的現象である」と定義し、景観を４つの構成要素（視点、視点場、主対象、対象場）の空間的な関係として捉えようとするモデルを提案した[5]（図-1）。

このモデルを具体的に確認してみたい。図-2 は、天橋立を大内峠から眺めた、横一文字と呼ばれる眺望である。ここでは、内海と外海を分ける砂嘴の地形的な特長が一目瞭然であり、砂嘴が主対象、海や岬などが対象場となる。一方、樹木で緩やかに囲繞された空間（視点場）の中に、視点として立ち石がおかれている。この立ち石は

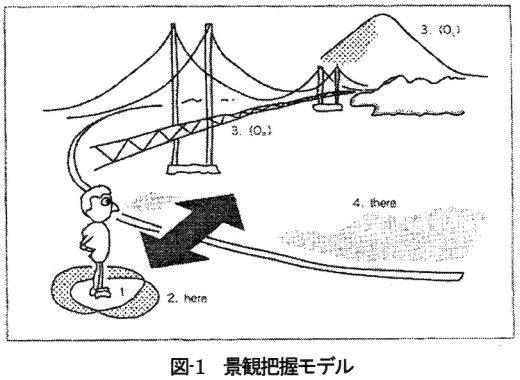

図-1 景観把握モデル

図-2 大内峠から見る天橋立（横一文字）

「股くぐり」をする場所であり、モデル的に視点まで空間化されている希有の事例として考えることができよう。

このように、このモデルは景観デザイン手法（特に伝統的な技法）をよく説明する。このモデルの明快さは、景観そのものだけではなく、景観把握モデルの構造をも写真として記録できることにあらわれている。では、この明快さは何に保証されているのだろうか。

篠原モデルにおいては、２種類の主体がある。それらは、景観を体験・観察している主体（モデル中では視点として代表される）と、デザイナーのように、あるいは図-2 の撮影者のように、景観を操作し、デザインしようとしている主体（モデルには含まれず、モデルを外から眺める主体）である。これらの主体と景観との関係には、それぞれ、外に出すという力が働いている（図-3）。一つ目は、景観に対して体験者を外に出すという点である。つまり、篠原モデルにおいては、体験者は景観の外におり、視点場を媒介にして景観に参加している。二つ目は、このような体験者も含めた景観体験に対して、設計者を外に出す。これこそが、操作論的景観論という立場を可能にしている。

一方、仮想行動という考え方においては、このような２種類の主体が逆方向に作用する。仮想行動とは、ギブソンの「空間の意味（Spatial meaning）」などに影響を受け、中村が創出し、親水行動や道路の景観設計において展開したものである[6]。それは、景観対象を見ると同時に、無意識にその中に入り込んで行動しようとするという心的な機構を指すものである。仮想行動を示す例えとして、よく臥遊がひかれるが、その道具となる山水画、とくに瀟湘八景型山水画は、強度の俯瞰景によって大景を写す作品が多い[7]。そのような眺望景観（山水画では点景が描き込まれた）は、空間の全体像と、行為のきっかけとなる部分（点景）を同時に楽しむことができ、仮想行動を誘発しやすいのであろう。ここでは、雪舟の「天橋立図」を例として挙げておく[8]（図-4）。

この仮想行動で働くメカニズムは、篠原モデルの逆のベクトルを有している。すなわち、この体験においては、時間的には未来の自分であったり、空間的には別の場所にたつ自分であったりする分身がまず発生する。その分身がどのような体験をするかを、現在の、この場所の自分が外から眺める。つまり、主体の二重化が生じているのである（図-5）。この仮想行動と篠原モデルは、表裏一体の関係と考えることができよう。

（2）景観体験における「もの」と「こと」

屋代は「いわゆるデザイン」と「景観デザイン」の相違を、「物」を対象としたデザインと「こと」を対象としたデザインの違いとして捉えた[9]。「景観デザイン」では

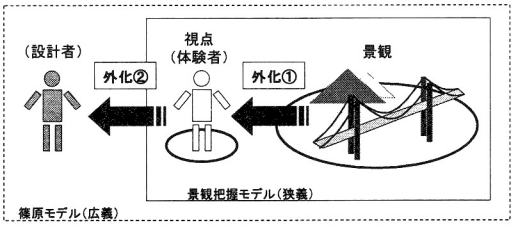

図-3　景観把握モデルの２つの主体

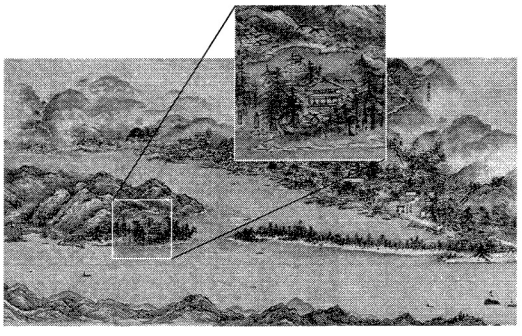

図-4　天橋立図（雪舟）

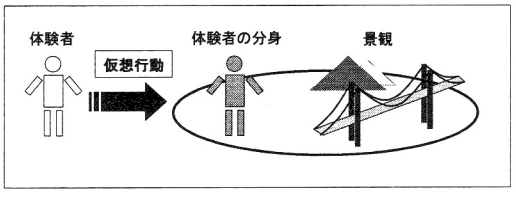

図-5　仮想行動における主体の二重化

「物」と「物」、あるいは、「物」と「人間・心」との関係性に注意が向けられ、この関係性は人間の知覚を通して体験される関係性であるとし、これらの関係性を「こと」としている。

それではここで「もの」と「こと」の違いについて考えてみたい。精神病理学者の木村敏によれば[10]、「ものとは、見るというはたらきの対象となるようなもののこと」であり、「見るというはたらきが可能であるためには、ものとのあいだに距離がなければならない（傍点、木村）」。つまり、ある主体が距離をもって客観的に見る対象が「もの」である。一方「こと」は、この「もの」のような安定した性格をもたないため、定義が難しい。それは主体と「こと」の間に、「もの」との間では成立した確かな距離を策定することができないからである。例えば、木村はその状態を、「私が景色を見て美しいと思っていること、このことは私の側で起こっていることのようでもあるし、景色の側で起こっていることのようでもある。あるいはそのどちらの側で起こっていることでもなくて、私と景色の両方をつつむ、もっと高次元の場所での出来事のようでもある（傍点、木村）」と表現する。しかし、このような不安定な状態を人は好まない。そのため、不安定な「こと」をすぐに対象化し「もの」として把握しようとする。これは景観体験においても同様であ

ろう。引用で示したような景観の「こと」的体験の後、われに帰った人は、「美しいものを見た」と言い、「美しさというものを余韻として味わうことになる」のである。もちろん、このような「もの」的な体験も重要な景観現象である。つまり、景観体験においては、このような「こと」的体験と「もの」的体験の相互を振り子のように行き交っている。さらに、「こと」が「こと」として成立するためには、「私が主観としてそこに立ち会っているということが必要」であるという。上述した景観体験の二重性において、景観に対する主体の（心理的な）位置関係も変化してくる。「もの」的体験においては距離をとり、「こと」的体験においては立ち会うということである。これらを図-6 に図示する。

以上の相違を踏まえて、前述した主体の二重化という現象を考察したい。まず、二重化される主体と景観の関係は、それぞれ「もの」的であり、「こと」的である。しかし、それらが同時に生まれるからこそ二重化である。木村は、芭蕉の有名な俳句（「古池や蛙飛び込む水の音」）をモチーフにしながら、「（この俳句によって提示される）ものの的なイメージの綜合が、その背後から純粋なことの世界をはっきりと感じ取らせてくれる」と述べ、この現象を「ものとことの共生関係」と呼んだ。このような豊かな相互関係を、景観体験において主体の側から捉えたのが、本研究の示した主体の二重化であると位置づけられよう。

（3）状況という視点

このような「もの」と「こと」の相互性を可能にするような、景観の捉え方はどの様なものか。本研究ではそれを「状況」と名づけたい。「状況（Situation）」とは、主体が、その他の主体や事物と、さまざまな時空位置において、さまざまな関係に立つことである。すなわち、主体がある環境に参加（engorgement）することによって生じるさまざまな関係が、「状況」ということである。状況意味論という論理学の分野では、状況とは、静的な事態（state of affairs）と、動的な出来事（event）の二側面があると指摘されている[11]。先ほど整理した「もの」「こと」の相違と、この二側面は近いものであろう。

ここで示したような景観現象の側面を、中村は空間相と形相の二面性として整理している[12]（表-1）。中村のいう空間相とは、仮想行動を通じて可能的行為の場として景観が眺められる場合の側面であり、ここで獲得されるのは、景観の身体感覚的意味である。一方形相とは、狭義の景観を指すことが多く、「物」の輪郭が意識の中心に形として浮かび出る場合である。このような物は、場所柄と結ばれた縁によって初めて生きた存在となり、こちらへ眼差しを向けた相貌的な「他者」として現前し、この良し悪しは倫理的価値によって決定されるとしている。

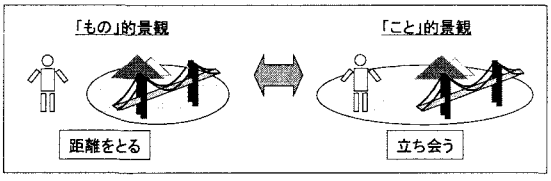

図-6　景観体験における「もの」と「こと」

表-1　景観の空間相と形相

区分		主な景観現象	Key-scape	景観体験の内容		評価のことば	価値発生の源	環境－自我
風景	空間相	空間の距離，物の奥行き	臥遊，道路	物の仮想的操作 空間への仮想的参加	意味	住みごこち 使いごこち，居ごこち	他者→（環境）→自己の身体感覚 感覚	自他の身体論的関係
		物かげの発生	山かげ，木の間がくれ	仮想の隠れ 深さ，				
		水平面，鉛直面の分極化	山と水面 塔と水面	重力場での姿勢				
		遠望と閉塞の分極化	ランドマーク ヴィスタ，見はらし，領域の縁	オリエンテーション 境域体験 縁体験				
		遠近の分極化	借景					
	形相（景観）	図，地の鮮明な分極化	山の姿 茂枝の松	輪郭と映り	姿	たたずまい おもむき	他者→環境→自己の在り様 自己の感覚	結縁 自他の倫理的
		隣図現象	山容木色 町並み	とりあわせ，しぼり おさまり				
		輪郭線の表情，リズム	枝ぶり 家構え	表情，身ぶり，構え 品格，顔（表）と裏				

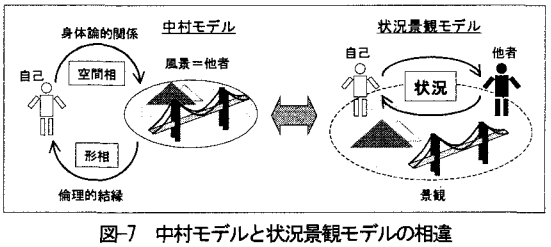

図-7　中村モデルと状況景観モデルの相違

「もの」と「こと」の相違で言えば、中村の空間相が「こと」的であり、形相が「もの」的であるといえる。中村は、両者を別のものとして把握しているが、先に示した「状況」という観点から景観を分析すれば、それらをひとつのものとして扱うことができる。表-1 中、価値発生の源、あるいは、環境－自我において、空間相・形相ともに「他者」という概念があげられていることに注目したい。自己から他者へのベクトル（身体論的関係）によって、風景の空間相の価値が獲得され、他者から自己へのベクトル（倫理的結縁）によって形相の価値が獲得される。前者の身体論的関係とは、「主体の行為」に関わる問題であろう。しかし、そもそも中村においては、風景は相貌的な表情をもった「他者」として立ち現れている。すなわち、自己と他者との出来事が風景を舞台として生じるということ、すなわち「主体の行為」の対象としての「他者」が風景に現れる。風景の中に「状況」を読むことと、風景の中に「主体の行為」と「他者」をよむことは同時の現象であり、その固定化されたかたちが中村の言う空間相や形相となっている。以上を図示すると、図-7 となる。

3．基礎理論の整理

（1）他者の問題

本章では、いくつかの基礎理論を整理しつつ、状況景

観の特徴を整理していく。まず、「他者」の問題からはじめたい。景観体験における仮想行動などを示す基礎理論としてよく引かれるのが、『The Experience of Landscape[13]』で展開された Jay Appleton の「Prospect-Refuge theory (眺望－隠れ家理論)」である。この著書は、様々な文学や絵画等の風景表象を分析しつつ、動物行動学的な観点から景観の美しさについて論じたものであるが、この理論のうちで最も重要な点は、景観体験の中に「他者」の視点を導入したことではないかと考えている。

「人間が環境から美的満足感を受け取るのは、その環境が棲息する(Habitant theory) のに適した場所であることを象徴的に表現しているからだ」という立場をとる Appleton は、Lorentz による「to see without being seen」に動物の棲息に関する基礎的な条件を読みとる。さらに、環境が動物の棲息に関して、実際にどうなのか (*actual* potential of the environment) ということではなく、どの様に見えるのか (*apparent* potential of the environment) ということが「Habitant theory」において重要であるとし、景観の評価に symbolism を導入する。自分の姿を隠す“隠れ場所 (refuge)”の象徴と相手の姿を見る“眺望 (prospect)”の象徴が、“危険 (hazard)”を表現する象徴に抗して備わっている時、人間はそこに棲息地の象徴を見て、美的な満足感を感じとるという。

「to see without being seen」が成立するためには、自己が見るものおよび自己を見ているものが存在しなくてはならない。その自分とは異なる主体が「他者」である。

サルトルは、「他者のまなざしはわたしに空間を授ける」と述べている。舟木によると、その理由は、「わたしの<見ること>のうちに「わたしが見られる」ということが組みこまれている」からであり、「その結果として、わたしの身体と他者の身体が一物体相互の関係のように一たがいの外部に存在していること、おなじひとつの光景のなかにたがいが見えるようにして、ともに存在していること」が可能となる[14]。先に、前節で、景観を「こと」的に体験するためには、そこに立ち会っていることが必要であると述べた。「立ち会う」ことを可能にするのは、「他者」にまなざされること、その「他者」のまなざしを感じることである。

一方、「to see without being seen」において要請される他者は、自己に危害を与えるもの、自己が危害をあたえるもの、いわば「敵」である。しかし、自己が感情移入できるような、いわば「友」としての他者も存在する。Appleton は、そのような他者を風景の中に認めることを「Participation by proxy (代理による参加)」と表現する。これは、先に示した仮想行動という考え方と同一のものであろう。

では、「Prospect－Refuge theory」において召還された自己、および、２つの他者（敵と友）の関係はどのようになっているのか。Appleton が紹介している風景画を見直してみたい（図-8)。深い渓谷に突き出した岩は、枝を広げた樹木に覆われており、その上には二人の男がいる。まさに Prospect symbol と Refuge symbol を兼ね備えた好風景である。絵画を鑑賞している私たちは、この二人の男を代理として風景に参加する。彼らは友としての他者である。では、彼らが身を守るべき敵としての他者はどこにいるのか。当然ながら、そのような他者を画中に見いだすことはできない。私たちは、画中には存在しない敵なる他者との関係において、友なる他者の居心地を評価し、風景を観賞しているのである。この友なる他者からみた場合、敵なる他者も観賞している自己も、空間の外から不可視の眼差しを送っているという点において同様の存在である。すなわち、「風景を観賞する自己＝敵なる他者」という関係が成立する。一方で、友なる他者が自己の代理となると言うことは、「友なる他者＝自己」という関係も成りたっている。つまり、他者が２種類いるように自己にも２種類あると考えられる。ひとつは敵なる他者である自己、すなわち、外から全体を眺める自己であり、もうひとつは友なる他者である自己、すなわち、内にいて運動を行う自己である。この関係は、前節で示した主体の二重化とほぼ同様の事態と考えてよい。すなわち、主体の二重化とは自己に対する他者性の導入であると考えることもできるだろう。まとめを図-9に示す。

図-8 Asher B. Durand (1796-1886) :Kindred Spirits

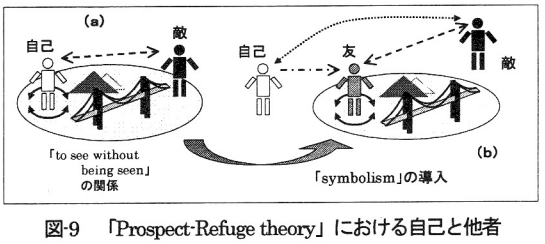

図-9 「Prospect-Refuge theory」における自己と他者

（2）主体のあり方の問題

近年、景観やデザインなどの分野で、アメリカの知覚心理学者ギブソンの「アフォーダンス」という概念が注目されている。中村雄二郎は、「環境あるいは事物からの表情を持った働きかけである。だから、それは、知覚者の行為と一体に定義される対象の性質でもある」と紹介し、「なぜ風景や景観にはわれわれにつよく訴えかけてくるものがあるか、についての回答」を与えくれる可能性をこの概念に期待している[15]。

「動物と環境の相補性を包含し」、「既存の用語では表現し得ない仕方で、環境と動物の両者に関連するものを言い表したい」とするギブソンは、「Afford（提供する）」という動詞からの造語として、「アフォーダンス」と言う概念を提示した[16]。端的にその内容を述べれば、対象・事象との関係で動物に対し提供する「行為の可能性（opportunities）」であり、例えば、大地のアフォーダンスは「支える」こと、路のアフォーダンスは「歩く」こと、ハサミのアフォーダンスは「切る」ことである。

このような「アフォーダンス」は、「包囲光」によって満たされた空間（「サーフェース」のレイアウト）を観察者が移動することによって現れる「包囲光配列」の変化の中から「不変項」を探索することによって現出する。ここで注目したいことは観察者（主体）のあり方である。

ギブソンの生体光学にとって重要なことは時間や空間という伝統的な枠組みではなく、お互いに相補的な変化項と不変項という概念であり、「移動」というあり方によって環境の変化項のなかから不変項を探索することが必要となる。しかし、生態光学における主体のあり方は「遍在」というあり方も呈する。ギブソンは景観的な例を通じて以下のように語る。

> 探索的移動によって景色が整然となると、家、町、あるいは生息環境全体の不変的構造がとらえられるであろう。隠れたものと現れているものとが１つの環境となる。そのとき、散在したものの下に地平線まで続く地面を知覚でき、同時にその散在物も知覚できる。個体は環境に定位する。それは、地形の鳥瞰図をもつというよりも、むしろあらゆる場所に同時にいるということである。

これまでの論旨では、「もの」と「こと」の間を架橋する理論が欠けていた。しかし、この「遍在」という考え方は、内にいること（つまりは「こと」的）に立脚しながらも全体像を把握する、いわば「もの」的な体験であり、そのベースには「こと」的な「移動」がある。また、「遍在」によって環境の不変構造が明らかになれば、それが「移動」のガイドとなり、また新たな体験をうながすことにもなるだろう。このように、これら２つのあり方の間を揺れ動きながら、私たちは環境のアフォーダンスを探索しているのであり、まさに前節で述べた「もの」と「こと」の相互性としての景観体験である。また、「遍在」という様相は、前項で取り上げた他者の内、「友なる他者」との共存を語っているとも考えることができる。ギブソンは以下のように述べる。

> 別の人の視点をとるということは、自分の視点では隠れているが他人の視点では現れている面を知覚できるという意味である。これはつまり、別のものの背後にある面が知覚できるということである。そして、もしそうならば、すべての者が同じ外界を知覚できる。

この引用で示されている状況は、他者による空間の成立とほぼ同様である。私たちは、ギブソン的な「移動」と「遍在」というあり方を揺れ動くことによって、環境の「アフォーダンス」を探索し、さらには他者と共有できる環境の「姿」を構築しているのだと考えることができよう。「移動」と「遍在」を図式化したものを図-10にあげる。

このような、いわば部分と全体がつながるようなあり方を、ギブソンは「入れ子構造（包摂関係）」と呼ぶ。この関係には２種類あり、１つは小さなスケールから大きなスケールまで、重層的に展開する一般的な入れ子構造であり、もう一つは、ある部屋から次の部屋へと、さらにはその次の部屋へとつながっていくような連続的な入れ子構造である（図-11）。風景の持つ「入れ子」性は、単に遠近を自在に変化させながら風景を愉しむという距離感の問題だけではなく、以上のような「もの」的、「こと」的双方の振幅の大きな体験を私たちに提供するという豊かさを風景が有しているということ示しているのである。

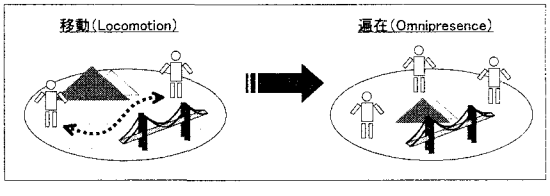

図-10　生態光学における主体のあり方

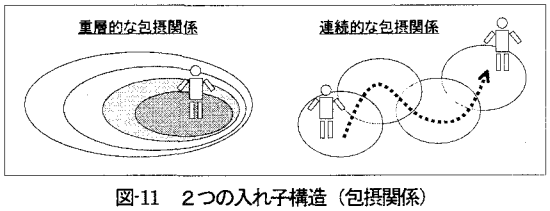

図-11　２つの入れ子構造（包摂関係）

（3）距離の問題

最後に、E.Hallの「プロクセミックス」理論を検討し「距離」の問題を考察する。ホールは、空間利用の視点から人間と文化のかくれた構造をとらえるための理論として、「プロクセミックス」を創出したが、その空間利用とは、コミュニケーションのあり方（行為のあり方）に基づいた、他者との距離の取り方である[17]。

人は、４つの距離帯を持ち、それぞれに遠近の相を持

っているとされている。その４つとは、密接距離、個体距離、社会距離、公衆距離である。眺望景観という大スケールを扱う本研究においては、具体的な距離の指標は重要ではないが、距離帯の４分類とその特徴のとらえ方は参照すべき事項である。表-2 の下段は、自己と他者の領域としての解釈である。これらの４つの距離帯は、ギブソンの包摂関係として理解することも可能である。つまり、公衆距離には社会距離が、その中には個体距離が、さらには密接距離が重層的に入れ子となっている。また、逃走反応を引き起こさない個体距離から社会距離の間にかけては、連続的な入れ子性も確保されている（図-12）。

表-2　４つの距離帯

	密接距離		個体距離		社会距離		公衆距離	
	近接	遠方	近接	遠方	近接	遠方	近接	遠方
特徴	身体的接触愛撫、格闘	親密な関係臨界的自己領域	自己と他者の境界	身体的支配の限界表情認知	対象の確正な認知	互いに隔離・遮蔽	痕跡的・意識的逃走反応	公的な関係
領域	自己の領域		友なる他者の領域		敵なる他者の領域			

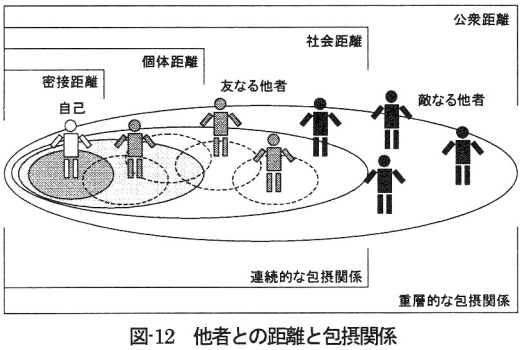

図-12　他者との距離と包摂関係

４．芸術作品に見る状況景観

芸術作品を通じて、状況景観的な見方の有効性や一般性を確認しておきたい。取り上げる芸術作品は、ピカソのキュビスムの作品である。

キュビスムの出発点を示す作品は、1907 年春から夏にかけて描かれたらしいピカソの＜アヴィニョンの娘たち＞と言われる。この絵画は、「人体表現の極端な歪曲と平面化、および遠近法的な空間のイリュージョンの徹底的な否定」と言う２点において、それ以前の絵画とは全く異なったものであった[18]。

この絵画の主題は、バルセロナのアヴィニョン街の娼婦たちであるが、もともとこの作品は、売春宿を訪れる２人の男と客を待つ５人の女を描くように構想されていたらしい。この変更は、状況景観の視点においても非常に興味深い。この変更を、飯田善國は以下のように評価する[19]。

> 絵を見る人は、画中での娼婦と男のやりとりを見るという関係から、画の中の女たちがあたかも現実の空間にいる現実の女たちであるかのように、絵を見る人に向かって（絵を見るあなたに向かって）挑みかかってくるのを感ずることになる。最初の構想の段階よりずっと生々しい主題に変わったのだ。

この変化を図示すると図-13 となる。つまり構想の初期段階では、売春宿のやりとりを外から見るという一般的な関係であり、本研究の視点で言えば、観賞する主体は外におり、客を代理として仮想行動的に観賞すると言う構造を有していた（図中 a）。それを、客を画中から排除し娼婦を前面に押し出すことによって、観賞者をその空間のなかに引き込み、他者としての娼婦に正対をせざるを得ないような関係を形成させる（図中 b）。ピカソは５人の娼婦の顔を３種類に描き分けているが、その中でもアフリカの仮面をモチーフとしたと思われる画面右側の二人は、娼婦の有する他者性を強調することに成功している。また、＜アヴィニョンの娘たち＞のもう一つの特色として、遠近法の否定がある。ピカソが「一点集中遠近法イリュージョンによることなく、しかもなお三次元的世界のリアリティを表現することができるか」という課題に与えた解答が、いわゆるキュビスムの「一つの対象をさまざまな視点から見たイメージを、同一の画面に結びつけると言う方法」だったのである。

この多視点による面の集合という手法は、まさに「偏在」というギブソン的な認知のあり方である（図中 c）。さらに、画中には描かれない自己が対象の周辺に遍在しているこのイメージは、アップルトンにおける主体の二重化（主体＝敵なる他者、図-8 の（b）参照）をも想起

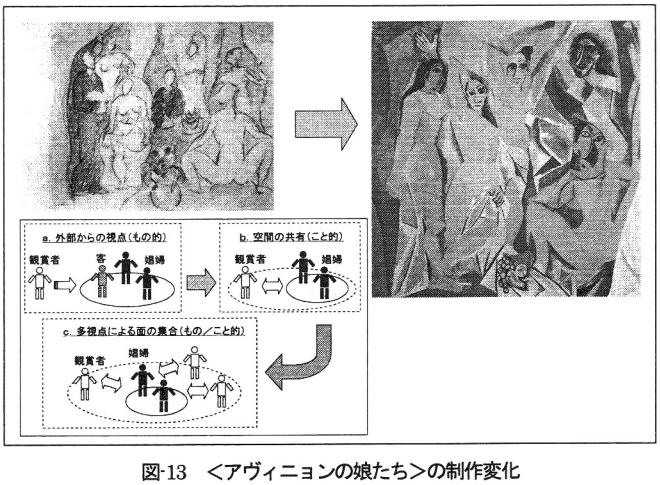

図-13　＜アヴィニョンの娘たち＞の制作変化

させる。つまり、ピカソが<アヴィニョンの娘たち>において達成したものは、一般的な「もの」的な絵画体験から、絵画の内部に立ち会うことによって生じる「こと」的体験へ、さらには、ギブソンの「遍在」と同様に、対象を複眼的に見せることでリアリティを確保した、状況景観的な体験であると考えることができるであろう。

ピカソはその後、多視点による面の集合と言う手法を切子面の導入によって深化させていくが、その手法を用いた風景画に<セレの風景>[20] (図-14) がある。飯田は、<セレの風景>に代表される分析的キュビスムの成果を、以下のように評価する。

> 絵画という想像的空間の中で、空間の中を歩行する意識が時間を経験し、この時間を経験する意識が同時に空間を経験する意識でもあるという二重性は、われわれが現実の風景の中を歩行している時にも味わう経験であって、ピカソの「セレの風景」は、現実のそういう風景体験を芸術の世界に移植した極めて独特な、新しい絵画であった。

このように、<アヴィニヨンの娘たち>に端を発したキュビスムは、現実的な風景体験と同様のものに到達した。このようなメカニズムを、絵画等の表象に頼らず具体的かつ大きな地形空間において分析するために、本研究では軍事的な事例に着目したのである。

5．軍事的な視点の有効性

軍事的な環境把握において留意されるのは、敵がどの様に動き、それにどう対処すればよいかという点であり、軍事的な事象への観察者の想像力が鍵となる。クラウゼヴィッツは『戦争論』における「軍事的天才」を論じた章において、「地形感覚」という概念を提起している。それは、「この感覚は、いかなる地形についても即座に正しい幾何学的表象を構想し、これに基づいて容易にその土地の様子に通じる能力である。言うまでもなくこれは想像力のはたらきである」というものである[21]。この概念を中心に、軍事における「地形」の意義について考察していきたい。

「地形」を軍事的に見た場合、それは単なる物理的な土地の形状ではなく、見る・撃つ（視界・射界）、隠れる（隠蔽・掩蔽）、近づく（接近経路）という具体的な軍事行動や、目的（緊要地形）、条件（障害）が、「地形」の要素となる[22]。つまり、軍事においてニュートラルで無意味な地形は存在せず、すべて具体的な軍事行動と密接に関連した意味、むしろ機能と呼べるようなものを有している。また、そのような地形の機能は、様々な視点からの考察を通じて発見され、この考察の能力が「地形感覚」ということになろう。

そもそも、「地形感覚」の原語は、ドイツ語で「der

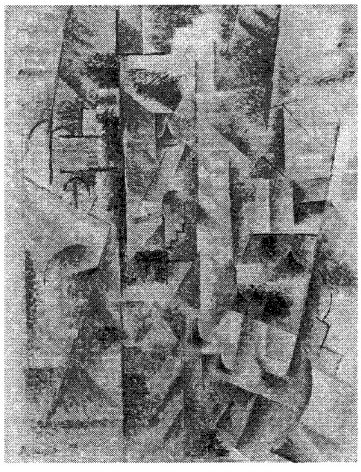

図-14　<セレの風景>

Ortsinn」であり、英語では「a sense of locality」と訳される[23]。この概念を、我が国にはじめて紹介したのは森林太郎であり、彼が「地形観」と訳している[24]。つまり、彼の邦訳によって「地形」という問題がより明確に主題化されたのである。

東洋にはクラウゼヴィッツ以前にも、『孫子』という良く知られた戦争論がある。森林太郎もその教養のうちにいたと思われるが、１３篇で構成されるの『孫子』には、地形に関するものとして「地形篇」第１０と「九地篇」第１１がある。荻生徂徠によると、「総体、地形篇ハ地形ヲ小ク見タル上ニテ云ヘルナリ。コノ九地篇ハ大キニ見タル上ニテ云ヘルナリ。地形篇ハ地ヲ小ク見タルモノナルユヘ地ノ形ナリ。九地篇ハ大キナル上ニテ云ユヘ地ノ勢ヒナリ」と位置づけられる[25]。『孫子』においては、「形」とは、運動（＝「勢」）の形象化あるいは結果であり、同時に、その「形」を契機に運動（「勢」）が生じるという相互性をもつものである。　これは、本研究において論じてきた「ものとことの相互性」と同様のものとして考えることができる。

すなわち、一般的には、「地形」を「観」ると解釈される訳語であるが、上述の「勢」と対になった「形」という概念を参照すれば、「地」に「形」を「観」る、と解釈することができよう。つまり環境（「地」）に事象（「勢」と対になった「形」）を観るということであり、まさに状況景観そのものの概念になりうるものとなる。

6．沿岸要塞の分析に向けて

以上の考え方に基づき、明治期につくられた沿岸要塞を分析し、状況景観モデルの一端を明らかにしたものが先に紹介した既存研究である。一般に、現象をモデル化するにあたって、留意すべき点は、モデルの包括性とデザインへの有効性の両立であろう。モデルの単純さ（＝

デザインへの有効性）を担保しつつ、「こと」的な景観体験をも包括するモデルを提示するための材料として選択した素材が沿岸要塞である。最後に状況景観モデル構築における沿岸要塞の意義を述べたい。

（1）明治期に建設された沿岸要塞の有効性

一般的な戦争の場面では、敵と味方が複雑に混在し、自己や他者などを明確に区分することが難しい。そのため非常にこみいった構造となる。軍事的な事例の中でも沿岸要塞を対象にすれば、比較的容易にモデルの検証が行えるのではないかと考えている。

要塞とは、ひとつの構造物を指しているのではなく、多数の砲台群やそれに附属する施設が広い範囲に集散し、その地域を軍事集団的に強化した広域的な水陸一帯の防禦区域を指すものである。沿岸であることの利点は、水際線によって敵と味方の活動領域が区画されていることにある。それにより、包摂関係が混乱させられないために、野戦などに比べると分析がしやすい。さらに、明治という時代においては、まだ航空機なども登場しておらず、電信なども未熟だったために、敵は視認する観測所も砲台そばに築かれていた。それは、砲台が海峡を眺める視点場として機能していたということである。また、射程距離も長くて 10km 程度であり、人間の可視領域内におさまることも重要なことである[26,27]。

また沿岸要塞における砲台位置の選定では、陸地側から一つ一つ眺望をチェックするという非効率的な選定の仕方ではなく、最初に要塞予定地を航行し、海側から眺められる陸地景のシークエンスにより砲台候補地を選定、その後、砲台の性能を考慮しつつ位置の調整を行ったと考えられる。これは、まず敵の視点となって、その土地を探索するということであり、その土地の軍事的なアフォーダンスを探索していくという構造になるであろう。

（2）沿岸要塞の状況景観的解釈

「地形」から「自己」と「他者」の関係を導き、それらの相互作用の中で全体的な把握を行うプロセスは、沿岸要塞の建設プロセスとほぼ同様になるのではないかと考えている（図-15）。

このようなプロセスで構築される要塞は、地形、砲台、敵の動き、そして地形の眺め（景観）の４つの要素で構成される図式で解釈される（図-16）。要塞構築においては、実際、敵がいるわけではない。つまり、これらは地形の眺めを介して、「地形感覚」的に様々なあり方で結びついており、それらの関係は、上述したプロセスに対応していると考えることができる。プロセスの①②は、地形の眺めから敵の動きを予測することであり、図-16では、点線の矢印で示される。一方、③のプロセスは、敵の動きに対して最適な砲台を地形の中に配置することであり、図-15では実線矢印で示され、④のプロセスは、砲台から敵への働きかけとなるため、図中の破線矢印となる。そして最後に、それら３つの関係が総合的に関係しあい⑤のプロセスになると考えられる。

以上のような考察を経ると、状況景観モデルがよりシンプルに考えられる。すなわち、まずモデルの最小単位として、景観を中心とした地形・砲台・敵の３者の関係があり、そのユニットがいくつか組み合わさることによって要塞モデルが構築される。これらの３者の関係が、３章で取り上げた基礎理論にほぼ対応している。つまり、砲台と地形の関係（図中Ⅰ）においては、まず敵艦から砲台を眺めた場合の地形の中での位置づけ（例えば隠れ具合や目立ち具合など）が問題となる。それはまさに、アップルトンのいう眺望－隠れ場理論と同種のものである。同様に砲台と敵との関係（図中Ⅱ）は、両者の距離が問題となるためホールのプロセクミックスが働くと考えてよい。最後に、地形と敵の関係（図中Ⅲ）は、地形

状況景観的環境把握	要塞の構築
① 環境の固有性の把握	① 地形条件の把握
② 他者の想起	② 敵の動きの想定
③ 最適な視点場の選定	③ 砲台位置の選定
④ 各視点場における関わり方	④ 備砲・首線の決定
⑤ 複数の視点場の組合せによる総合的な把握	⑤ 各砲台の役割・守備範囲の関連づけ
（a）	（b）

図-15　状況景観的環境把握と要塞構築

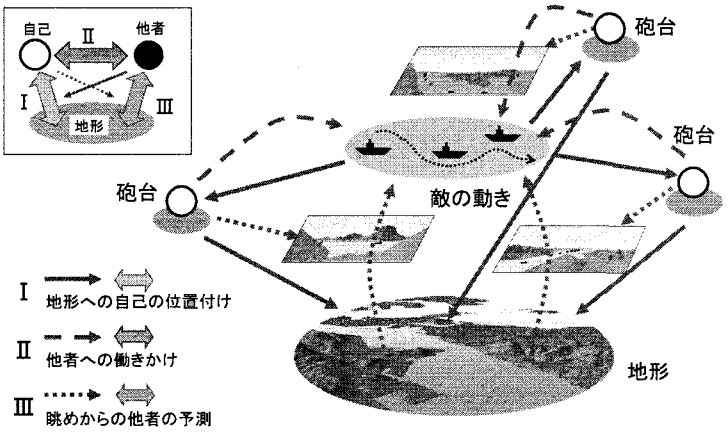

図-16　沿岸要塞の図式的解釈

から敵の動きをどの様に予測するかということであり、ギブソン的には、地形に内在するアフォーダンスをどの程度探索できるかということが課題となる。

7．おわりに

本研究では、景観論における「参加の美学」を検討するため、景観体験を「自己」「他者」「地形」の３者が「状況」を中心に関係しあうものとして捉え直そうと目指している。本稿では、その背景となる考え方を詳細に論じたが、要塞分析を通じて構築した状況景観モデルの詳細に関しては稿を改めて報告する予定である。本研究では特殊な事例を分析しているため、その一般性については未熟な部分が多い。ただし、考え方としては様々な応用の可能性が広がっていると思う。

例えば、「地形」を「都市空間」と読み替えてみる。都市をそぞろ歩いたり、オープンカフェでのんびり過ごす時、写真として残せるような都市景観を味わう以上に、次々にかわるシークエンス（ギブソンの連続的な包摂関係）に魅了されたり、行き交う人々（「他者」）との出会いが、その楽しみの基盤になっているように思われる。これも、状況景観的な一側面である。

あるいは、見知った土地を散歩したり、故郷に帰ってきた時のなごむような、気がやすらぐ感覚と、旅行などで見知らぬ土地に立ち寄ったときの不安と心浮き立つような気持ちが同居する感覚などの相違も説明可能かもしれない。状況景観的には、両者とも不可視の「他者」が遍在している。両者の体験の相違は、その遍在する「他者」が友なのか、敵なのかというものに起因するのではないだろうか。

今後は、沿岸要塞を対象とした分析を深め、モデルの精度を高めることに加えて、上のような、より一般的な景観体験に適用し、具体的な景観デザインや計画にヒントを与えるようなモデルの構築を目指していきたい。

謝　辞

はじめに、経験の浅い著者に光栄ある発表の場を与えていただいた土木計画学研究委員会に感謝いたします。

論文奨励賞の受賞論文「明治期に建設された沿岸要塞における砲台配置と眺望景観の関係に関する研究」は、熊本大学小林一郎教授と永野謙一氏（現在、八代市役所に勤務）との共著論文であります。小林教授には、大変長い時間、議論をさせていただき、様々な側面から助力をいただきました。この場をかりて、改めて深謝の意を表します。

また、受賞論文は、著者の博士請求論文の一部であります。その主査である東京大学篠原修教授には、私の曖昧な上に欲張りな研究に対し、常に本質的でシンプルなご指導、ご助言を頂いた。心より感謝いたします。

最後になりましたが、東京大学内藤廣教授、清水英範教授、中井祐助教授、東京工業大学斉藤潮教授には、本研究を進める上で貴重なご助言をいただきました。ここに記して感謝の意を表します。

参考文献

1) 星野裕司・他：九州内の明治期に建設された砲台から得られる眺望景観に関する研究，土木計画学研究・論文集，No. 18，pp. 339-348，2001. 11
2) 星野裕司・他：明治期に建設された沿岸要塞における砲台配置と眺望景観の関係に関する研究，土木計画学研究・論文集，No. 19，pp. 347-358，2002. 11
3) 星野裕司・他：事象に着目した眺望景観に関する一考察－軍事的知見を参照して－，土木計画学研究・講演集，CD-ROM版、2002.
4) 中村良夫：NHK人間講座　風景を愉しむ　風景を創る、日本放送出版協会、2003
5) 篠原修：新体系土木工学59：土木景観計画、技報堂出版、1982
6) 中村良夫：交通行動に関連した景観体験の空間意味論的考察、国際交通安全学会誌Vol.2 No.2、1979
7) 中村良夫：風景学入門，中公新書，1982
8) 朝日百科 日本の国宝 別冊『「天橋立図」を旅する　雪舟の記憶』，朝日新聞社，2001.4
9) 屋代雅充：景観をデザインする：景観デザインの対象と仮想行動のための景観デザイン、木原・進士編『山河計画　景』、思考社所収、1985
10) 木村敏：時間と自己、中公新書、1982
11) ジョン・バーワイズ、ジョン・ペリー、土屋俊也（訳）：『状況と態度』，産業図書，1992
12) 中村良夫：大地の低視点透視像の景観的特質について、土木計画学研究論文集No.1、1984
13) Jay APPLETON : The Experience of Landscape － Revised Edition、John Wiley & Sons Ltd. 1996
14) 舟木亨：<見ること>の哲学　鏡像と奥行き、世界思想社、2001
15) 中村雄二郎：述語集Ⅱ、岩波新書、1997
16) J.J.ギブソン：生態学的視覚論、サイエンス社、1985
17) エドワード・ホール：かくれた次元、みすず書房、1970
18) 乾由明：20世紀美術の黎明、『世界美術大全集　第28巻　キュビスムと抽象芸術』所収、小学館、1996
19) 飯田善國：ピカソ、岩波現代文庫、2000
20) 神吉敬三：理知と情念の所産、『ピカソ全集３　キュビ

スムの時代』所収、講談社、1982
21) クラウゼヴィッツ：戦争論，岩波文庫，1968
22) 陸戦学会：『野外幕僚勤務の解説』，1988
23) CARL VON CLAUSEWITZ ： On War , Edited and translated by M Howard and P Paret EVERYMAN' S LIBRARY , p. 127 , 1993
24) 森林太郎：大戦学理，『鴎外全集　第34巻』所収，岩波書店，1974
25) 野口武彦：江戸の兵学思想，中公文庫，1999
26) 浄法寺朝見：日本築城史～近代の沿岸築城と要塞、原書房、1971
27) 原剛：明治期国土防衛史，錦正社，2002

状況景観モデルの構築にむけた基礎的研究*

星野裕司**

明治期に建設された沿岸要塞を対象として、そこに現れる環境把握手法を分析してきた。本稿では、それらの背景となる考え方を、状況景観として詳細に論じている。まず、景観把握モデルや仮想行動などの基本的な景観論を検討し、本研究の視点がすでに内包されていたことを示した。次に、眺望-隠れ場理論やアフォーダンス、プロクセミクスを検討することで、景観における自己と他者の関係を考察した。また、芸術作品を対象に状況景観の視点の有効性を示した。一方、軍事における地形感覚という概念に着目しつつ地形の意義を明らかにし、要塞にこれらの考え方を適用することによって、状況景観を自己と他者と地形の関係として整理した。

Basically Research for Development of Landscape Model Based on Situation *

By Yuji HOSHINO**

Some papers studied the relation of the arrangement and landscape of coastal batteries of Meiji Era This paper researches some ideas for development of landscape model based on situation. At first, the suitability of this logic is pointed out referring the basically landscape model. Secondly, this studies the relation of self and others in landscape experience through researching some basically theories and cubism art. On the other hand, this points out the meaning of topography in the approach to the sense of locality. At last, through studying coastal batteries, landscape model based on situation is explained by the relation of self and others, topography.